

二〇二四年度 早稲田大学大学院教育学研究科
 博士後期課程 一般・外国学生入学試験問題 「資料解読」
 【教科教育学専攻（国語科教育学・国語科内容学）】

解答上の注意

- 一、教科教育学専攻（国語科教育学・国語科内容学）の入学試験問題は、出願時に届け出た指導教員の欄に従い、左記の表の解答すべき問題を解答しなさい。

志願票に記入した 研究指導名	志願票に記入した 指導希望教員名	解答すべき問題・ページ	必要な 解答用紙 枚数
国語科内容学研究指導	松木 正恵	一 日本語学（含日本語教育）（P. 2～4）	一枚
国語科内容学研究指導	内山 精也	二 中国古典文学 （P. 5～6）	一枚
国語科内容学研究指導	金井 景子	三 近代文学 （P. 7～8）	一枚
国語科内容学研究指導	五味 潤 典嗣		
国語科内容学研究指導	和田 敦彦		

- 二、解答用紙の所定欄に受験番号・氏名・研究指導名・指導教員名を必ず記入すること。
- 三、解答の際には、問題番号、設問番号を記入してから解答すること。（例「問題一―問二」等）
- 四、解答すべき問題以外を解答した場合、当該解答は「0点」となります。
- 五、問題用紙は「八枚」（本ページ含む）です。

以上

博士後期課程 入学試験問題

科目名 資料解説 (国語科教育学・国語科内容学)

一 日本語学(含日本語教育)

次の文章は、松下大三郎「動詞の自他被使動の研究」(一九二三(二四)の「動詞の定義及び分類」(全文)と「自動と他動」(一部)である。これを読んで、後の問に答えなさい。(なお、引用した本文は、須賀一好・早津恵美子編『動詞の自他』(ひつじ書房 一九九五)に再掲されたものによる。)

格を認めない。即ち意志体と見ない。管仲は「相なり」に対して全く意志がなく全く努力を要しない代りに全く自由を持たない。「相なり」は管仲の一時的の出来事ではなく管仲の本性を説明して居る。「名をや立てなむ」と「名をや立ちなむ」なども意志的と自然的との別である。自動と他動とを論ずるに動作に意志的と自然的と両方有ることを忘れてはならない。

四、依拠性動詞と非依拠性動詞

- 舟に乗る 椅子に凭れる
- 席に着く 蒲団に座る
- 東京に居る 日本に在る
- 人に便る 友達に逢ふ

の——は依拠動詞である。依拠動詞は作用の概念を分解して作用其自身の概念と作用の客体の概念との二つとして作用其の物が客体に依拠するとして両概念を統合し、客体の概念を控除して作用其の物の概念のみを表はす動詞である。上の例の「乗る」は「舟」に依拠し「凭れる」は「椅子」に依拠し、自己は依拠に関して本体であつて「舟」「椅子」を客体とするが自己は唯その本体を表はすのみで客体は表はして居ない。客体は他動「舟」「椅子」をして表はさせるのである。此の客体を表はすものを客語と云ひ、客語を有する「乗る」「凭れる」などを掃着語といふ。

依拠動詞は掃着語になる。そうしてその客語は依拠的の客語「何々に」を用ゐる。非依拠動詞は他物へ依拠しない動作を表はすもので「読む」「拵へる」「知る」「忘れる」などの類である。併し此れ等も之を依拠化せしめて用ゐる場合はある。

- 机に書を読む 娘に着物を拵へる
- 雲行に天気を知る 公務に私を忘れる

の——などは本来非依拠動詞であるものを特に依拠化した臨時的依拠動詞である。依拠動詞の中「居る」「在る」等は其の動作が静止的であるがその他は進行的である。そこで依拠動詞を静止的と進行的とに分ける。

五、出發性動詞と非出發性動詞

- 井から水が出る 国から手紙が来た
- 彼の人から聞いた 此处から見渡す

の——は出發動詞である。其処から出發する動作を表はしてゐる。その客語(＝)は出發格(何々から)を用ゐる。

「読む」「拵へる」「死ぬ」「殺す」などは非出發動詞である。勿論「三頁から読む」「豆から豆腐を拵へる」などの様に出発化せしめることは出来る。

六、^⑤自象動詞と属象動詞 主語を要しない動詞がある。「そうです」などはそうである。これは作用の概念から主体の概念が分解されて居ないものである。作用が其れ自身の作用なのである。一般の動詞はある主体に属する作用を表はすから属象動詞である。例へば「花が咲く」の「咲く」は花といふ主体の属象を表はす。

七、掃着動詞と非掃着動詞 何等かの客体を有する動詞を掃着動詞といふ。例へば「花を見る」「国に帰る」の「見る」「帰る」は「花」「国」を客体として意義が之に掃着する。何等の客体をも有しない動詞を非掃着動詞といふ。「死ぬ」「泣く」「叫ぶ」などはそうだ。

動詞の定義及び分類

動詞は作用の概念を表はす詞である。

認識の対象たる現象には主体と作用との二面がある。「鳥が飛ぶ」のも一つの現象であるが鳥は主体で「飛ぶ」は作用である。主体たるべき方面は他の作用に対して客体たる場合がある。その場合には客体と作用とが一緒になつて一つの作用になるのである。主体たるべき方面をその主体と客体とに共通な点から観察して之を事物といふ。名詞は事物を表はし動詞は作用を表はす。

事物でも作用でも本体と属性との二面がある。「彼の鳥」は一つの事物、「中々飛ぶ」は一つの作用であるが「鳥」と「飛ぶ」は本体で「彼の」と「中々」は属性である。名詞と動詞とは本体を表はし副詞と副体詞とは属性を表はす。勿論接続詞は副詞の一種、前置詞は副詞又は副体詞の一種である。

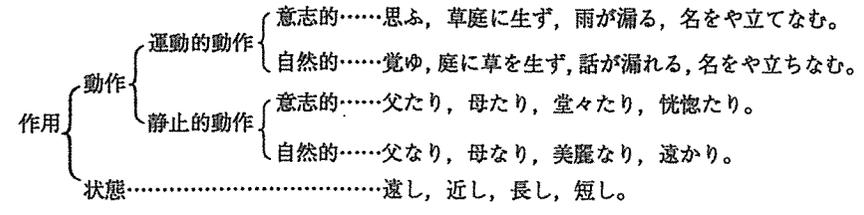
自他動及び被使動を論ずるに必要な、動詞の分類は次の如くである。

- 一、単詞的動詞と連詞的動詞 「行く」「帰る」「読む」「書く」などの様に単詞より成つて之を分解すれば詞でなくなる動詞を単詞的動詞といふ。又「東京に行く」「国に帰る」などの様に二詞以上が相連つて一つの事柄を表はして居るものも一つの動詞である。之を連詞的動詞といふ。連詞的動詞は対内的には二詞以上であるが、対外的には一詞である。
- 二、単念動詞と複念動詞 「行く」「帰る」などは一動詞が一概念を表はすから単念動詞である。併し「行かせる」「帰られる」などは「行か」と「せる」又は「帰ら」と「れる」との二概念を表はして居る。こういうのは複念動詞である。併し「行きます」「行つた」などは複念ではない。連詞的動詞は皆複念である。

三、動作動詞と状態動詞 動詞は作用を表はす詞であるが作用には動作と状態との二種がある。「波が起つ」は動作であるが「波が高い」は状態である。動作とは事物の作用を時間といふ形式に由つて認識したものを云ひ、状態とは時間といふ形式に由らずに認識したものをいふ。

作用に動作と状態との二種があるから、動詞は分れて動作動詞と状態動詞との二種となる。^③従来は状態動詞を形容詞と云つて別の品詞としたが形容詞といふ名称は甚だ不都合である。元來形容詞は Adjective の訳語であつて叙述的能力の無い詞、換言すれば作用を表はさずに唯属性だけを表はすもので、日本語では「此の」「或る」「有ゆる」「大した」などの類である。然るに^④日本文典で動詞の一種なる「遠い」「長い」の類を形容詞といふのは国語教授と英独語教授と並べ行ふ上に於て甚だ不都合だ。

動作動詞は動作を表はすのであるが動作には運動的動作と静止的動作と二種がある。そこで動作動詞は運動的動作動詞と静止的動作動詞との二種に分ける。



運動的動作にも静止的動作にも各々意志的と自然的との別がある。「父たり」と「父なり」との区別などがこれである。

- 1 管仲、斎に相たり
- 2 管仲は斎の相なり

1の「相たり」は意志的動作である。管仲に人格を認めて居る。管仲は「相たり」に対する意志体である。意志体であるからその動作に対して自由を有して居ると同時にその動作を為すには自己の努力を要する。それであるから「相たり」は管仲の一時的の動作であつて管仲の本性ではない。管仲の意志が變つて努力が消滅すれば「相たり」といふ動作は同時に消滅するのである。所が2の「相なり」は管仲をその動作の主体とは見るが其の人

博士後期課程 入学試験問題

科目名 資料解説 (国語科教育学・国語科内容学)

自動と他動

⑥ 動詞に自動性動詞と他動性動詞との別がある。此の区別は事物の作用に特別の材料を要するかどうかの区別である。作用に特別の材料を要しない動詞を自動詞と云つて、作用に特別の材料を要するものを他動詞といふのである。

- 1 花が散る 2 風が花を散らす
- 人が死ぬ 賊が人を殺す

1は自動で2は他動だ。「散る」「死ぬ」といふ動作には別に材料は要らない。単に「花」「人」だけで出来る。併し「散らす」「殺す」には動作の材料としての他物が要る。風は散らすべき物無しに散らすことは出来ない。賊も殺すべきもの無しに殺すことは出来ない。「花」「人」を作用の材料として作用の中へ引張り込まなければその動作が成立しない。併し他物を材料に供用するといふことは、概念と概念との統合の形式上に於ていふのであつて実際の動作を云ふのではない。実際の動作はそれは一つの客観的現象であつて自動、他動の区別はない。地震が家を倒したのと家が地震に因つて倒れたのとは実際の地震には区別はない。唯人間が地震を主にして考へて他動的概念(倒す)を作り、家を主にして考へて自動的概念(倒れる)を作るだけであつて実際の震災に在つては二種概念の対象たるべき両面を持つて居るのである。他殺と自殺などでも人間が或る標準を設けて区別するだけで、考へ方に由つて他殺も人の揮ふ刀に由つて傷死したとも考へられ、自殺も社会の迫害が人を殺したとも考へられる。それであるから動詞の自動詞を文法上から区別するに自殺と他殺を区別する様な非文法的標準を以て区別してはいけない。

従来他動詞を定義して他動詞は他を処置する動作を表はすものだと云つた。此の処置といふ語に拘泥して「犬が子供に食ひ附く」の「食ひ附く」を他動だと解いた学者もある。「食ひ附く」は犬が子供を処置したので子供は大に痛癢を感ずるといふのである。「食ひ附く」といふ動作は子供に害を与へるには相違ない。併し其れは事実上の問題で、犬其の物が子供を処置したのであつて「食ひ附く」といふ概念が子供と云ふ概念と処置的に統合してゐるのではないから、他動詞とは云へない。「犬が人を噛む」と云つた場合には「噛む」は他動である。それは人が迷惑するからではない。「噛む」といふ作用概念が「人」といふ概念を自分の方へ引附けて自己の作用中に消化してその作用に対して材料化するといふ形式を以て二概念が統合されるからである。「子供」に「噛み附く」に至つて「噛み附く」は依拠動詞であつて「噛み附く」といふ概念が子供の概念の方へ進行して子供の概念へ依拠するのである。

自動詞の別は概念運用の形式上に在る。概念と概念との統合上の関係に在る。即ち概念が分解されて二概念となるその分解され方に在る。全く形式上の問題である。他動とは他物の作用を自己の作用に同化することを云ふのである。「花が散る」の「散る」は花の作用であつて花の自動である。それを「風が花を散らす」といふとその「散らす」は花の作用たる「散る」を風の作用に同化せしめて考へたのであつて「散らす」は風の花に対する他動である。「散らす」も風に対しては自動であるが花に対して他動なのである。元来同じ事件であるが其れが甲の作用として観れば甲の自動で、乙の作用として観れば乙の甲を客体とする他動なのである。全く唯観方の区別である。事件の実質は問題ではない。人が他人に殺されずに病死した場合でも病気が人を殺したと考へられ、自殺した場合でも人その人自己が殺したと考へられ、又甲が乙を殺した場合でも乙が死んだと考へられる。唯「犬が人を噛む」といふ様な場合に「噛む」を、人の動作を犬の動作に同化して考へたのだと論ずる場合に他動詞は対称的他動詞、単独的他動詞の別を生ずる。

他動詞は作用の観念を分解して、作用其の物としての概念と、作用の材料としての概念との二つとし、材料の概念を控除し作用其の物の概念だけを表はすものである。材料の概念は控除してあるから其れだけは欠損になつてゐる。その欠損は他語をして表はさせる。「何々を」は即ちそれである。此れは名詞の他動格を用ゐるのであつて他動詞に対して他動的客語と云はれ、他動詞の方は客語に対して帰着語と云はれる。他動詞はその他動的欠損が客語に由つて補はれて始めて意味が具備するのである。

他動詞といふ概念の内包は上の説明で略盡きて居るが、その外延を説明するのに分類の必要がある。

対称的自他動と単独的自他動

他動詞と自動詞と両々相対立して居るものを対称的自他動詞といふ。

自動	他動
1 花が散る	風が花を散らす
木が枯れる	虫が木を枯らす
山が見える	人が山を見る
本が出る	本屋が本を出す
2 人が死ぬ	賊が人を殺す
本が出来る	学者が本を拵へる
子供が学校へ這入る	親が子供を学校へ入れる

上の例は左欄でその作用の主体(○)として居るものを右欄では客体(●)にして他物の作用に同化せしめて居る。左欄と右欄とは主客が變つただけである。自動詞の区別を教へるにはさういふ例が一番分り易い。

対称的自他動は多くは1の様(○)に活用を變へて区別するが、中には別々の詞を用ゐるものもある。2はそれである。

自動	他動
風が吹く	風が木を吹く
人が笑ふ	人が貴方を笑ふ
子供が哭く	子供が餓を哭く
人が饒舌る	人が下らぬことを饒舌る

上の様なのは対称的自他動ではない。之を図解すると次の様になる。

自動	他動
風が吹く	天が風を(起す)
木が(靡く)	風が木を吹く

他動詞は作用の観念を分解して、作用其の物としての概念と、作用の材料としての概念との二つとし、材料の概念を控除し作用其の物の概念だけを表はすものである。材料の概念は控除してあるから其れだけは欠損になつてゐる。その欠損は他語をして表はさせる。「何々を」は即ちそれである。此れは名詞の他動格を用ゐるのであつて他動詞に対して他動的客語と云はれ、他動詞の方は客語に対して帰着語と云はれる。他動詞はその他動的欠損が客語に由つて補はれて始めて意味が具備するのである。

他動詞といふ概念の内包は上の説明で略盡きて居るが、その外延を説明するのに分類の必要がある。

博士後期課程 入学試験問題

科目名 資料解読 (国語科教育学・国語科内容学)

若し「風が吹く」の「吹く」が活用を変へるかどうかして「風を起す」といふ様な具合の意味に使はれるならば、其れは他動の「吹く」に対する対称的自動と云へる。「木を吹く」の「吹く」も「木が靡く」といふ様な具合の意味に使はれるならば其れは他動の「吹く」に対する対称的自動と云へるのであるが不幸にしてそういふ用法が無い。自動の「吹く」は他動の「吹く」とは対称的でない。喩へば此の二者は父子の関係ではなく伯父と姪の関係だ。子は子だが自分の子ではなく自分の兄弟の子だ。伯父に子が無く姪に父が無いために知らない人は二人を親子と思ふかも知れないが其れは違ふ。

こういふ動詞は動作の材料たるものに対して明確な概念が起らずに漫然動作を考へた場合には自動詞となり、材料の概念が明確に分解された場合には他動詞となるのである。名を附けたら明暗自他動とでも云へようか。

他動詞が有つて其れに対する自動詞の無いものを単独他動と云ひ、其の反対を単独自動といふ。

本を <u>読む</u>	字を <u>書く</u>
水を <u>汲む</u>	茶を <u>飲む</u>
鼓を <u>打つ</u>	笛を <u>吹く</u>
人を <u>斬る</u>	音楽を <u>奏む</u> ⑨

の——の様なのは単独他動詞である。之に対称的な自動詞は無い。併しそれは詞が無いだけでその概念は作れないことはない。例へば若し茶に意志が有つて茶の方が茶碗を持ち上げて進んで人の口へ這入ることが有るとしたら「飲む」の自動詞が出来るであらう。そういふ事は無いにしても若し茶の方を主にして云ふ習慣が生ずれば「飲む」の自動が出来る訳である。現に「売る」などは元来単独他動詞であつたのであるが、商人が品物を主にしていふ習慣が出来た為に「彼の本は売れました」など、いふ。此の「売れる」は「売る」の対称的自動詞である。「読める」「飲める」などの様な可能動の意味を持つたものとは違ふ。

「人が茶を飲む」の「飲む」は茶の動作を人の動作に同化させて考へた概念である。茶の動作は茶が人の口へ這入ることである。吾々の頭にそういふ概念が起つて居らないからそういふ意味の自動詞がないので、概念は無くして直観的の観念は有る。その観念を概念にする場合に茶の自動とせず人の他動とした概念即ち「飲む」が生じたのである。

人が <u>居る</u>	父母が <u>有る</u>
空が <u>冴える</u>	人が <u>眠る</u>
雨が <u>降る</u>	日が <u>影る</u>
彼は学生である	此れは私の帽子で <u>ございます</u>

の——などは単独自動詞である。之に対称的な他動詞が無い。併し其れは詞が無いだけで概念の成立は可能である。現に漢文では「我有父母」の「有」は日本語の「有る」に対称的な他動であり「若不施徳悪能有天下」の「有」は「在」に対称的な他動である。

前に挙げた「風が吹く」——「風が木を吹く」などは対称的自他動ではないからその自動の方は単独的自動で、他動の方は単独的他動である。

状態動詞は従来形容詞と称して自動でも他動でもない様に考へたが矢張り自他動の中に在る。近時の文語や口語では状態動詞は大体単独自動だ。

問1 下線部①について、現代の動詞ではどのように扱っているかを述べなさい。また下線部②について、「行きます」「行った」は「複念」ではなく、「行かせる」「帰られる」は「複念」、つまり「連詞的動詞」と言えるのはなぜか、説明しなさい。

問2 下線部③・④について、松下がこのように「不都合」と述べているのはなぜだと思うか。日本語と英語における、いわゆる「形容詞」の位置づけの違いに言及しながら、具体例を挙げて詳しく説明しなさい。

問3 下線部⑤の動詞の存在についてどう思うか、自身の考えを述べなさい。

問4 下線部⑥・⑦をもとに、松下の動詞の自他についての捉え方を説明しなさい。その上で、特に「に」格を取る動詞の位置づけをどうするかについて、現代の動詞の自他論を参考にしながら、自身の意見をまとめなさい。

問5 下線部⑧のような自他対応の捉え方についてどう考えるか、自身の考えを述べなさい。

問6 下線部⑨・⑩について、「単独他動詞」は対になる自動詞がないわけだが、自動詞的な描き方をしたい場合には、どのような表現していると思うか。ヴォイスの体系についても言及しながら説明しなさい。

(以上)

博士後期課程 入学試験問題

科目名 資料解読 (国語科教育学・国語科内容学)

二 中国古典文学

Aは『四庫全書総目提要』の『王荊公詩註』五十巻の提要、BはAの対象である『詩註』の一部である。A・B二種の資料を読み、後の設問に答えなさい。

A 宋李壁撰。考宋史及諸刊本、壁或從玉作璧。然壁爲李燾第三子、其兄曰厘曰塾、其弟曰壘、名皆從土、則作璧誤也。壁字季章、號雁湖居士、初以蔭入官、後登進士。寧宗朝累遷禮部尚書參知政事兼同知樞密院事、諡文懿、事蹟具宋史本傳。是書乃其謫居臨川時所作。劉克莊後村詩話、嘗譏其註歸腸一夜繞鍾山句、引韓詩不引吳志、註世論妄以蟲疑冰句、引莊子不引盧鴻一・唐彥謙語、指爲疎漏。然大致据摭蒐採、具有根據、疑則闕之、非穿鑿附會者比。原本流傳絕少、故近代藏書家俱不著錄。海鹽張宗松得元人槧本、始爲校刊。集中古今體詩、以世行臨川集校之、增多七十二首、其所佚者附錄卷末。考葉紹翁四朝聞見錄、稱開禧初韓平原欲興兵、遣張嗣古覘敵、張還、大拂韓旨。復遣壁、壁還、與張異詞、階是進政府云云。是壁附和權姦、以致喪師辱國、實墮其家聲、其人殊不足重、而箋釋之功、足裨後學、固與安石之詩、均不以人廢云。

B

書湖陰先生壁二首 楊德逢也。

茆簷長掃靜無苔，花木成畦手自栽。

柳詩：「石門長老身如夢，旃檀成林手所種。」

一水護田將綠遶。

漢西域傳序云：「自燉煌西至鹽

澤，往往起亭，而輪臺、渠翠皆有田卒數百人，置使者、校尉領護。」師古曰：「統領保護管田之事也。」又：「桑弘羊奏：可遣屯田卒詣故輪臺以東，置校尉二人分護。」

兩山排闥送青來。

「樊噲乃排闥直入，大臣隨之。」

○五代沈彬詩：「地隈一水巡城轉，天約羣山附郭來。」○冷齋夜話云：「山谷嘗見荆公於金陵，因問：『丞相近有何詩？』荆公指壁上所題兩句云：『一水護田云云，此近所作也。』」○石林詩話云：「荆公詩，用法甚嚴，尤精於對偶。嘗云：『用漢人語，止

可以漢人語對，若參以異代語，便不相類。』如此句「護田」「排闥」之類，皆漢人語也。此法荆公用之，不覺拘窘。」○如「周顥宅作阿蘭若，婁約身歸窳堵波」者，以梵語對梵語，亦此類。

二〇二四年度 早稲田大学大学院 教育学研究科

博士後期課程 入学試験問題

科目名 資料解読 (国語科教育学・国語科内容学)

〔設問一〕 Aの傍線1「考宋史……壁誤也」を書き下し文に改めよ。

〔設問二〕 Aの傍線2「大致摺……會者比」を書き下し文に改めよ。

〔設問三〕 Aの傍線3「是壁附……人廢云」を①書き下し文に改め、②現代語訳せよ。

〔設問四〕 Bの後ろから三行目「石林詩話云」から最後の「亦此類」までを書き下し文に改めよ。

〔設問五〕 Bの詩(「書湖陰先生壁二首」其二)の本文(「茆簷長……送青來」)を、①書き下し文に改め、②現代語訳せよ。

以上

博士後期課程 入学試験問題

科目名 資料解読 (国語科教育学・国語科内容学)

近代文学

一、次に示すのは、水上瀧太郎の小説「山の手の子」(『三田文学』一九一一年七月号)の一節である。文章を読み、問いに答えなさい。

それは確に早春の事であつた。日毎に一人で訪づれる崖には一夜の中に著しく延びて緑を増す雑草の中に見る限りいたいた草の花が咲いて居た。その草の中にスクスクと抜出た虎杖を取る為に眼下に打続く裏長屋の子供等が、嶮しい崖の草の中をさがさがあさつて居た。小汚ない服装をした鼻垂しではあつたが犬のやうに軽快な身のこなしで、群を作つて放肆に遊び廻つて居るのが遊相手の無い私には何んなに懐しくも羨しく思はれたらう。足の下を覗くやうに崖端へ出て、自分が一人ぼつちで立つて居る事を子供等に知つて貰ひ度いと思つたが此方から声を掛る程の勇氣もなかつた。全く違つた国を見るやうに一挙一動の掛かれた彼等と、自分も同じやうに振舞ひ度いと思つて手の届く所に生へて居る虎杖を力充分にやつと抜いて、子供たちのするやうに青い柔い茎を噛んでも見た。しくしくと冷め度い酸い草の汁が虫歯の虚孔に沁み入つた。

斯うした果敢ない子供心の遺瀨なさを感しながら日毎同じ場所に立つ御屋敷の子の白いエプロンを掛けた小さい姿を、やがて長屋の子らが崖下から認めた迄には、如何にかして、自分の存在を彼等に知らせやうとする瓦を積んでは崩すやうな取り止めも無い謀略が幼い胸中に幾度か徒事に廻らされたのであつたが遂々何の手段をも自分からする事なく或日崖下の子の一人が私を見付けてくれたが偶然上を見た子が意外な場所に佇む私を見るとさも吃驚したやうな顔をして仲間の者にひそひそと私語く気配だつた。かさかさ草の中を潜つて居た子供の顔は人馴ぬ獣のやうに疑深い眼付で一様に私を仰ぎ見た。

其の翌日。もう長屋の子と友達になつたやうな気がして、いつもよりも勇んで私は崖に立つて待つて居た。やがてがやがや列を作つてやつて来た子供達も私の姿を見て怪しまなかつた。

『坊ちゃん、お遊びな。』
と軽く節を付けて昨日私を見付けた子が馴々しく呼んだ。私は何と答へていゝのか解らなかつた。『町つ子と遊んではいけません。』と云つた乳母の言葉を想起して何か大きな悪い事をしてしまつたやうに心を痛めた。それでも、

『坊ちゃんお出でよ。』
と気軽に呼ぶ子供に誘はれて、つい一言二言は口返しをするやうになつたが悪戯子も、流石に高い崖を攀登つて来る事は出来ないので大きな声で呼び交すより説方が無かつた。

此様な日が続いた或日、崖上の私を初めて発見した魚屋の金ちゃんやんは表門から町へ出て来いと云ふ智恵を私に与へた。暫時は不安心に思ひ迷つたが遊び度い一心から産婆や看護婦にまじつて乳母も女中達も産所に足を運んで居る最中を私の小さな姿は黒門を忍び出たのである。曾て一度も人手を離れて家の外を歩いた事の無かつた私は、烈しい車馬の往來が危つかしくて、折角出た門の柱に噛り付いて不可思議な世間の活動を臆病な眼で見居るのであつた。

麗な春の昼は、勢よく坂を馳下つて行く俥の輪があげる軽塵にも知られた。目まぐるしい坂下の町を暫眺めて居ると天から地から満ち溢れた日光の中を影法師のやうな一隊が横町から現はれて坂を上つて来た。

『坊ちゃんお遊びな。』
と遠くから声を揃へて迎へて来た町つ子を近々と見た時私は思はず門内に馳込んで了つた。汚ならしい着物の、埃まみれの顔の、眼ばかり光る鼻垂しは手々に樺切を持つて居た。

『坊ちゃん、お出でな皆で遊ぶからよ。』
中では一番年増の金ちゃんやんは尻切草履を引ずつて門柱に手を掛けながら扉の陰にかくれて恐々覗いて居る私を誘つた。坊ちゃん小さい姿は町つ子の群に取巻かれて坂を下つた。

間も無く私は兄になつた。其の当座の混雑は、私をして自由に町つ子となる機会を与へた。或は邪魔者の居ない方がかゝる折には結句いゝと思つて家の者は知つても黙つて居たのかも知れない。

比較的に気の弱いお屋敷の子は荒々しい町つ子に混つて負を取らないで遊ぶ事は出来なかつたが彼らは物珍しがつて私をばちやほやする。私は又何をしても敵ひそうもない喧嘩早い子供達を恐いとは思ひつゝも窮屈な陰気な家に居るよりも誰に咎められる事も無く気ままに土の上を馳廻るのが面白くて、遊びに疲れた別れ際に『明日もきつとお出で』と云はれるまゝに日毎に其の群に加つた。

問一 この場面からは、「私」と「町つ子」のどんな関係が読み取れるか、説明しなさい。

問二 この場面の語りや表現にはどのような特徴が指摘できるか。小説本文を根拠にしなから、あなたの考えを述べなさい。

博士後期課程 入学試験問題

科目名 資料解読 (国語科教育学・国語科内容学)

二、次の文章を読んで以下の問いに答えなさい。

昨年、児童圖書は非常に改善されたといふ聲を聞く。なるほど、一時から見たら、児童圖書は全般的に向上したと言へるだらう。しかし、これが果して積極的な内容の改善を意味し、児童圖書の質的向上と言へるかどうか。試みに昭和十四年に発行された単行本三七〇種について見ると、童話八九種、少年講談三七種、漫畫二六種、冒險小説二一種、少年少女小説二一種、科學一五種、傳記六種、歴史七種、その他一四八種といふことになる。十五年八月現在までに発行された二八〇種の単行本について見ると、童話一一一種、少年少女小説三四種、漫畫四三種、科學一三種、傳記一二種、歴史一一種、少年講談九種、その他四七種である。

この統計を比較して見ると、十五年は科學が前年の十二月現在の二五種に對して、八月現在で既に一三種を數へて、その躍進を約束してゐる。また少年講談は、十四年の三七種に比して、十五年は僅か九種である。漫畫が十四年の二六種に比して、十五年は既に四三種を數へてゐる。

また童話が昭和十四年の八九種に比して、十五年は早くも一一一種に及んでゐる。この童話の數は兩年を通じて断然他を壓してゐることが目立つ。

このやうに見てくると、児童圖書の出版は、全般的には依然として、賣れるから出す、子供が好むものを出すといふ、極めて商業主義的出版企畫によつてゐることが判る。

出版企畫の基準は、國民文化に寄與するか否か、國民大衆の教化に資するか否かといふ點にあるべきことは前述の通りである。これを児童圖書について言へば、それが子供の心性や生活を高めるか否かといふことにある。

児童圖書の出版は、そのやうな文化性・教育性が、出版企畫の第一條件として考慮されなければならない。従つて、子供の好みといふことは、尊重されなければならないが、それが児童圖書出版企畫の第一條件であつてはならない。まして子供の興味に追随することは、児童圖書としての根本條件を無視したものである。例へば、漫畫にしても、子供が好むからといふよりも、子供にとつて漫畫が必要であるか否かといふことが、充分に検討されなければならない。

子供は批判力を持たないと同時に、自分たちに與へられる圖書について何等の發言もしない。従つて児童圖書は、完全に著者によつて、出版業者によつて與へられるものであつて、子供の要求に従つて作られるものではない。この特殊の性格が、良いものを選んで與へるといふ役割を出版業者に課する點である。子供のためとあれば、商業主義の多少の犠牲を忍んでも、良いものを出版するだけの情熱と見識とを、児童圖書を出版するほどの出版人には誰でも持つて貰ひたいものである。児童圖書に關する限りは、一冊の低俗なものもないといふことであつて欲しい。どこでどんな子供が手にとつても、その總てが上述のやうな文化性・教育性を持った圖書であるといふこと でなければ、到底、無批判・無選擇の兒童に正しい指導を與へ、良い文化を普及せしめるといふ、児童圖書出版の理想は達し得られぬと言はねばならない。

問一 本文一行目「児童圖書は非常に改善された」とあるが、具体的に児童向けの出版物がどう変化していったのか。当時の状況とあわせて論じなさい。

問二 ここで対象となつてゐる時期に書かれた日本の小説、または評論を自由に一つとりあげて、この資料と関わらせながら論じなさい。

研究指導

教員名 ()

受験番号

氏名

早稲田大学大学院教育学研究科

博士後期課程 一般・外国学生入学試験解答用紙

科目名 資料解読

【教科教育学専攻（国語科教育学・国語科内容学）】

大学記入欄

問題番号

←

裏面に続く

←

